

ミャンマー マングローブ便り 第5号: 共有林プロジェクトと水産養殖!

住民とマングローブの共生を目指して

エーヤーワティ・デルタ住民参加型マングローブ総合管理プロジェクト、JICA 技アロ、2006.12 ~ 2012.03

ミャンマー国森林局実施、農業サービス局・水産局協調、JICA支援

平成 19年 8月 19日

マングローブ魚付き林とカキ養殖の成功を目指して

1.1 プロジェクトサイトの水産事情

これまでの調査で水産事情がだいたいはっきりしました。それは、その日暮らしが殆どの対象地域住民は、漁業を一つ重要な生計の糧としています。漁業はマッドクラブ、ブラックタイガーエビ、アカメ類、ナマズ類、ヒルサなどを対象として、カニカゴや目のとても細かい小型刺し網などを使っています。漁師への聞き取りによれば「昔はもっと大きかった」、「以前はもっと採れた」とのことで、資源の目減りが危惧されます。このような小規模な漁業村民が漁業資源に頼っているにもかかわらず、漁獲データが記録されていません。理由は次のように考えています。

- ① 漁業行政がデルタ全体の漁業をカバーしていないこと。
- ② 漁業は、様々な住民が従事していること(零細、専業、移動漁民など)。
- ③ 漁民の自家消費用の漁獲量が多いこと。また、
- ④ 漁獲の販売形態が様々なこと(戸別、仲買など)です。

従って、現状では各魚種の正確な漁獲量はもちろんのこと、特にカニやエビはその生物学的なデータがありません。よって自然資源の減少にも繋がりがかねない養殖には着手できません。持続的な漁業のためにも、漁獲データの収集と漁業資源調査が急務です。

1.2 養殖対象種の選定

本プロジェクトはマングローブ保全と住民の生活の共存を目指しています。漁業分野から見れば、この構想は本邦水産庁が推進する「魚付き林」構想と重なります。プロジェクトの実施を通じてマングローブ保全に貢献する住民に水産養殖による生計向上のチャンスがもたらされて当然です。では共有林グループの活動として適切な養殖は？現在のところ次のように考えています。

- ① お金がかからず、高度な技術を必要としない養殖。
- ② 養殖する地域内の天然資源を活用する養殖。
- ③ 市場性の高い養殖(市場で売れること、貯蔵性が高く且つヤンゴンなどの市場近辺の養殖漁業と競争できる養殖)

これらを重ね合わせて考えると、カキ(*Crassostrea spp.*)が養殖対象種の第一候補として浮かび上がりました。

1.3 養殖試験の開始

対象地域の海域近くに生息しているカキを養殖対象種の候

補としました。しかし、養殖技術の確立に必要なカキの生物学的な知見、例えば、産卵時期や採苗時期やその後の成長などのデータはありません。したがって、実際に採苗や養殖試験を行うことで、この地域に見合った適正なカキ養殖技術を確認していくことが重要です。現在、ピニヤラン保全林区の三つの河川域に養殖棚を設置し、カキ養殖試験を開始しました。まず、カキ養殖の第一段階として、採苗試験を実施中です。これは、毎月数種類の材料の採苗器を垂下し、適切なカキ種苗の採苗時期を調査するための試験です。6月はじめに垂下した採苗器には多数の付着稚貝が見られ、現在大きなものでは、殻長約 5mm 以上に成長しています。今後は、引き続き、カキの成長を計測し、採苗時期を調査するとともに、共有林活動の対象村落においても、養殖試験を実施する予定です。



共有林活動で植えた地元の木材を利用したのカキ養殖棚の製作。村民は自分達の家も自ら建てるので、手馴れたものでした。



現場で入手可能な貝殻やココヤシ殻などを利用しての採苗器を作成しました。採苗器の材料も検討の予定です。



垂下後約2週間後の採苗器の表面。付着した多くのカキ稚貝が観察できました。引き続き計測を実施する予定です。(大きい稚貝で殻長 5mm)

水産養殖専門家 岩尾恒雄